

【パネルディスカッションでのコメンテーター発言主旨】

2019. 7. 11 板垣 隆夫

1. デュアル・レポートラインについて

- ・数年前から様変わりして、デュアル・レポートライン論に対する合意が急速に広がってきた
- ・ただその意味するところは、人によって様々でかなり幅が広い
- ・出発点となる単に社長にも監査役にも内部監査結果を報告するという意味では、以前から広範に実行されてきた
- ・別府先生などが唱えてきたのはそれだけではなく、指示命令権と一定の人事権を含むレポートラインであった
- ・また報告と言う面でも、不祥事発生時にどちらに先に報告するかなどが新たに問題になる
- ・指示命令権と一定の人事権についても、様々な態様があり得る
- ・指示命令権を内包した報告も、監査機能面と業務運営面に区分して対応する考え方もある
- ・人事権でも、指名提案権から同意権、参考意見まで、監査部門長だけか一般部員までか様々なバリエーションがある
- ・最も大切なことは、各社の状況、条件に見合った態様は何かを執行側と議論を行い、会社として主体的に決定して、実行していくことである

2. 内部監査部門の実状を把握し、対話をおこなうこと

- ・内部監査部門の在り方は、急速に変わり、進化している
- ・内部監査には、様々なタイプや段階がある。○準拠性監査や悉皆監査に徹するところから、○リスクアプローチによる監査に基いた提案中心の監査、○ガバナンスプロセス、リスクマネジメント、内部統制を対象にした経営監査、○経営トップをも監査対象とする監査 まで。
- ・重要なことは、自社の内部監査がどの段階にあり、どういう方向を目指すのかを対話し、理解すること
- ・その上で、監査役として内部監査の充実強化を積極的に支援すること

3. 監査人との連携の強化

- ・J-SOXは形骸化していると言われ、制度として極めて大きな問題を抱えており、三神さんの批判には全面的に賛成である
- ・しかし、制度はすぐに変わるわけではなく、毎年毎年相当の資源投入を続けざるを得ない
- ・そうした中で、会社法の内部統制システムを監査する監査役は、J-SOXに殆ど関与しないままで良いのか
- ・自社で行われているJ-SOX評価・監査の実態を知り、会社法の業務監査の成果を活かして、J-SOXの実効性向上に貢献すべきではないか
- ・三神さんの仰せの通りKAMは重要で、その導入は監査人との連携を深める絶好のチャンスとなり得る
- ・J-SOX、KAMを含めて、自社における三様監査の実効性向上の具体策を、監査役が主導して検討し、行動に移していくべきである
- ・9月25日の監査技術ゼミの住田さんは、会計士協会でもKAMに最も精通した方であり、その話は必聴である

4. 監査役、内部監査を巡る状況の変化は発信力を高める大きなチャンス

- ・金融庁フォローアップ会議、経産省のCGS研究会で守りのガバナンス、とりわけ監査役、内部監査の問題が重要課題として取り上げられている
- ・従来攻めのガバナンス中心のCG改革論議が大勢であった中で、画期的な動きである
- ・これまで、監査懇話会や監査役協会の中で監査役同士だけで議論し、深めてきた内容を今こそ外部にも発信する時である
- ・二つの会議で監査役について厳しい発言を繰り返してきた富山和彦氏を10月23日の監査技術ゼミにお呼びすることにしている
- ・監査役の意見を発信するチャンスとして、大いに議論したいと考えている

以上